

老年心理学者・橘覚勝再考

—— その生涯と学説 ——

伊 東 眞理子

はじめに

現在、老人問題や高齢者福祉は、政治の世界においても、学界やマスコミ界においても、最も重要なテーマの一つになっている。新聞やテレビにも老人問題が取り上げられない日は無く、書店には老人問題のコーナーが設けられ、それに関する書物が山積されている。

老人問題がこれほど盛んに論議されるようになったのは、我国の高齢化率が7%を越えた1970（昭和45）年頃からではないかと思われる。その頃、合計特殊出生率も人口の現状維持に必要な2%を割った。そして、ここ10年程前から老人の扶養や介護について、財政・施設・マンパワーの面から危機意識が高まり、格別頻繁に老人問題が論じられるようになった。

しかしながら、高齢化率が5%以下で家族制度が老人を守っていた頃に、既に高齢者問題を研究していた先覚者達がいた。その一人として、私は、かつて大阪大学文学部に籍を置いた故・橘覚勝博士を紹介しようと思う。

橘覚勝博士は、1900（明治33）年に生まれ、長じて東京大学文学部で心理学を専攻し、1923（大正12）年には、同大学心理学科の副手に採用される。博士の指導教授は、我国の心理学の先達として有名な松本亦太郎教授である。その松本教授が、早くも、その時代に、橘博士に老人問題の研究を指示した。橘博士は、最初、松本教授の言葉にかなり抵抗を禁じ得なかったようである。「研究としては確かに新分野には違いはないが、老人の研

究など一体何になるか、将来の発達を約束する児童、青少年の研究ならいざ知らず、死の寸前の人生段階を研究しても何の役にも立たぬではないか¹⁾」と感じたようである。しかし、松本教授は「是非誰かがやらねばならぬ問題だ」と、更に強く慫慂した。この頃、大正天皇の銀婚の盛典に際し全国規模での90歳以上高齢者が表彰されるようなこともあり、老人問題研究がようやく緒についた。表彰に関する調査資料が、研究開発の機会を作ってくれたのである。我国の養老の事蹟や思想を歴史的に究明することがここに始まり、橘博士も、このテーマを与えられたことを幸いと感じ、研究に集中するようになったのである。

私事にわたるが、私も大学院時代、内海教授（大阪大学名誉教授）から、老人問題を研究するように示唆されたとき、大きな抵抗を感じたのであった。私は、子育ての経験を生かして、母子福祉を自分の研究のテーマと考えていたのである。しかし、内海博士は「これから社会に求められる学問をしなさい」と強く老人問題を勧められた。それから内海博士の指示に従って老人問題の研究をしているうちに、橘博士と同様に興味²⁾を覚えるようになり、しかも、老人問題が前代未聞の大問題となり、潮流に乗ることができた。

橘博士にとっての松本教授も、私にとっての内海博士も、その門下生に対して適確な指示を与えた訳だが、正にこのような門下生への指導力は、高齢の学者にとってこそ、備わり得るべきものである。ここにも、高齢者の活動分野について考察すべきことがあると思われる。

その後、橘博士は1948（昭和23）年に大阪大学文学部心理学講座の助教授に就任して、1952（昭和27）年に教授に昇進した。1963（昭和38）年に退官し、1978（昭和53）年に逝去している。私の師匠である内海博士は、その頃、橘博士と面識を得て話を聞いていた。そんな訳で、院生時代より橘博士を研究するよう紹介された訳である。

1. 老年学の源流とその近代的生誕

さて、橋博士によれば、Gerontology（老年学）という言葉が、Geriatrics（老年医学または老年病学）に対して唱え出されたのは、1944年アメリカにおいて‘Gerontological Society’が結成され、その機関誌として‘Journal of Gerontology’が1946年に発刊された頃からである。geriatricsという言葉は、I. L. Nasherによって1909年‘New York Medical Journal’において初めて用いられたようだ。同じく彼によって1916年‘Geriatrics’という大著が、更に、1919年には、M. W. Thewlisによって‘Geriatrics, A Treatise on Senile Conditions, Diseases of Advanced Life and Care of the Aged’（老人病学、老衰および老人保護に関する一考察）が公刊されている。そして Thewlis は、その後、それを全面改訂し、‘The Care of the Aged (Geriatrics)’と改題、その第2部においては、‘Geratology’¹⁾という語を用い、‘The Science of the Phenomena of Decadence’（衰頹現象の科学）と注釈を付け、衛生 hygiene の問題について‘Gerocomia’³⁾という語を当てている。Gerocomia とは、即ち、hygiene of advanced life（高齢期の衛生）という意味であった。

また、15世紀迄のイタリアに目をやると、Gabriele Zerbi が‘Gerontocomica’という言葉を用いて、Gerontocomica, Concerning the Care of the Aged and the Way of Living（原著ラテン語では‘Gerontocomica, Scilicet de Senum Cura atque Victu’で一老人の保護とその暮らし方）という著述を公にし、老年期の生活について多くの示唆を与えていた。ともあれ Gerontology または geriatrics に類似した用語が古くから唱えられていたのである。

本来、geron、geras は共にギリシャ語であり、前者は old man、後者は old age という意味を持つ。このような接頭語を冠した語については、前述のように Thewlis が1884年頃 Gerontology という言葉を用いた彼によって活用場を与えられたことになる。その意味は、氏の述べるように‘a species of animals approaching extinction’（涸衰接近の動物）

における ‘the science of the phenomena of dacadence’ (衰頹現象の科学) である。

gerocomy とは、the science of the treatment of the aged (老人処遇の科学) であり、gerontic という語は old age という意味に用いられたもので、gerontocracy (老人優位制、老人支配制) とは government by old men の意味であり、スパルタの gerusiaが、このような政治組織を持っていたのであろう。

以上のような考察を重ね、橘覚勝博士は geratology にしろ近年の gerontology にしろ、このような接頭語を持つ老年または老人を意味する語は、ギリシャ語の geron (old man)、geras (old age) を語源として、それが後程ラテン語、更に下がって英語に転化し、最近に至って活用され、新造された、とみる。そして博士は、老年学に文化史的、または歴史的に接近しようとした。

(1) 古代西欧の老年観

博士は、古代ローマの Cicero がラテン語で書いた有名な論文 ‘De Senectute’ (老年について—44B. C) を用いて、古代西欧の老年観をまとめている。つまり、Cicero が、能弁の Cato の口を借りて語らせるところによれば、老年は、彼らローマ人が共通にもつ重荷とみることに躊躇しなかったのではあるが、老年の陰惨で、悲観的イメージを持つことに対しては、大いに否定的であった。彼によれば、人間は能力の上下を問わず、訓練と適応とによって、その知的能力は老年まで保持しうる。事実、Cicero 自ら、人生のさまざまな興味や仕事の中に、その満足感を勝ち得ようとするかのように、心身の鍛練を怠らなかったのである。そして、個人的な観察から以下のような老齡に対するマイナス面の指摘ができるとする。

1. 活動的生活からの逃避
2. 身体力の弱体化

3. 官能的快樂の剥離

4. 死の接近の自覚と気力や希望の破滅

そして、その上で Cato に、老年に関心のある多くの青年に対して「精神的支柱の無き者にとっては老年とは退屈極まりない時期である。しかし、我々は短絡的に、老年は成年の後に、成年は青年に続いて、そして青年は児童の後に忍び寄るものだと考えてはならぬ。それぞれの時期において、それぞれの異なった、そして、それぞれに人生の興味があるものだ。あたかも春は花、秋は実りというように。神に服従して争わぬことこそ賢者なのだ」と言わしめている。このようなモノローグは、人生の享樂を尽くして孤独に陥った者、さらに名声と尊敬と威信とを勝ち得た高貴なる高齢者の多くの実例から出たものであったという。

以上の考察により、当時のローマ人にとって、老年はもちろん歓迎すべきものではなかったが、Cicero はそれを出来るかぎり、擁護、弁明しようとしたことがわかる。つまり、彼は、若い世代に対して、老年の生活と英知とを知らしめたかったのだ。そして橘覚勝博士は、それらを考察、詮索しながら、兼好の徒然草⁴⁾の老年観を次のように連想する。

古代ギリシャの老年観が、徒然草のそれと比較しうべきものとすれば、兼好は「命長ければ恥多し」と向老長命を否定することによって、老人に同情的な好意を示し、老人の理想像を髣髴させた。一方はキリスト教的、他方は仏教的倫理観に基づいていたであろうが、共に、宗教的道義観に支えられているところに共通性が見出だされる。

(2) 中世の原始医学的老年観

博士は、Karl Pearson⁵⁾ の丹精を込めた Witchcraft（巫女の知恵または邪芸）に関する記述を引用して、中世の老年観を以下のように考察する。

巫女は鬼婆（hag）伝説によって老女であると断定されている。Pearson によれば、知患者ぶった巫女は、先史時代および古代の母権制の遺物であり、かつ狂乱的儀式または因習の残滓であるとする。すなわち、

母権時代の老婦人は、種族の法規や家族の風習の主宰者であり、また管理者であった。農耕牧畜に関する儀式を司り、神聖な儀式や舞踏と共に多くの邪鬼的な不純行為を行なったという。むろん巫女には善良な巫女も邪悪な者もあり、前者は幸運をもたらし、後者は飢饉、悪疫をもたらす。そういう力を持ったいわば女祈祷師として一般に畏敬の念をもたれていた。これはキリスト教的鬼神学 (christian demonology) というようなものまで生み出したという。なるほどヨーロッパの医学史をみても、ルネッサンスを経過した近世の初頭には、いわゆる“魔女”が横行したようである。その正体こそ判明しないが、とにかく人間に災害を加える悪魔女であったらしい。このようなものが発生した理由として、人間が科学を手に入れ始めたが、その反面において不安と焦燥のために魔術的なものに魅せられたことによるのであろう。特に女性である所以は、教会の権威が新興科学の力に失墜する不安に、教会の連中が罪を女性に転嫁し、欲求不満の教会人が、女性の生理の不思議を悪魔とみたと推察している。

翻って、博士は、わが国での考察では、平安時代の猿楽において重視された「山姥」の表現に目を向ける。それは、山の神の巫女として、最初は神の守役で、後にその神の妻となる（前述の Pearson の記述では priestess は goddess ともなるのと同一である）。その巫女に気高く生きている者の多い事実から“姥”を老年の女と視るようになったらしい。うばを老嫗の義に考えたのも古来からのことであろうが、やはり「神さびた生活」をする女性の意である。これらのことから、姥が鎮魂の神の招来、招福、除災的な祈祷に参加することは、既述の場合と同じである。老巫女がシャーマン (shaman) としての性格を持ち、呪性を帯びていたと考え、差し支えない。

二 西洋中世はともかく、わが国においてさえ、このように姥を鬼婆と表象
一 される所以はいかなる点にあるかについては、黄泉の醜女の表象転化では
なかろうかと連想している。

(3) 近世における科学的老年観

ここでは、Venice の名門に生まれ、百歳長寿を全うした寿命的天才である Luigi Cornaro⁶⁾ (1464~1566) の科学的老年観を高く評価している。

Cornaro は、当時の貴族の乱れた不行跡な生活によって、31歳に至る迄に、胃病、疝痛、発熱、激しい渇きその他いろいろな悪疫に悩まされていた。このような不幸な身体の違和状態は、飲食における不摂生に基づくものだとし、生活態度や形式を一変して、独自の健康法と訓練法を編み出して約25年の後 ‘La Vita Sobria’ (節制生活について) と題する論述を公にした。それに続いて、85歳時の創作『健康は高寿の基』は、世の注目と称賛を得た。彼は、それまでの錬金術的な gold water やあやしげな若返り治療法を到底信じる事が出来なかったのである。そして、彼はライフサイクルの特性に関する養生法や慢性病予防の方策についての知識を提供したのであった。

即ち、老年は不可避であっても、健康でありさえすればその運命的進攻を防ぐことができ、若返りや延命も可能と説くのが一般的であった時代に、この Cornaro の健康法は、老年に関する神秘と共に、老化と老化に伴う疫病に対処する明確な経験的手段を明らかにし、一昔前の錬金術的思想を排除した。Cornaro は、この論文の最後に、Francis Bacon⁷⁾ (1561~1626) が残した労作 ‘Historia Vitae et Mortis’ (生と死の歴史) を用いて老年について得た事実を挙げている。

1. 老年における身体組織の修理は十分に行なわれない
2. 死は内部の精力の喪失とその回復の不可能による
3. 歳をとるということは、日時の経過以外の何ものでもない。そして老化の兆候は、身体の乾燥によっておこる

そして、適度の運動、適切な栄養、身体の冷却は、三位一体にして生命保持に不可欠のものとした。Cornaro 自らもこの原則に従い、万年節度を守ったのである。女性が男性に比して長命であることは、女性の生活活動が中庸であるからだろうと言っている⁸⁾。こうして、橋覚勝博士は、老年

学の源流について一応19世紀の問題まで言及し、そして大胆にも、わが国の老年観、養老道と対照して考察したが、いかなる意味であろうとも、老年に対する Bacon の ‘The History of Life and Death’ に勝る言葉は他に求めることは困難であると述べている。

(4) 近代老年学の生誕

博士は、old age に関する近代的研究の発展史を T. F. Lawton の示唆によって次の3期に分類する。

- | | | | |
|---|-----|-----------|--------------------------------|
| — | 第1期 | 1830~1920 | 近代的研究の発展 |
| | 第2期 | 1920~1940 | geriatrics (老年医学) の発見と組織的研究の開始 |
| | 第3期 | 1940以降 | 研究の発展拡充と gerontology (老年学) の生誕 |

以上の理論的根拠については、第1期は ‘biology’ という言葉が始めて唱えられたことにより、生物学と医学との間に一線が引かれた頃からとし、第2期は、geriatrics として老年期 (old age, senescence) の医学的考察が、ようやく組織的に行なわれ、その概念が一般周知に至った時代とする。そして第3期は、geriatrics から gerontology へ展開した時期として、この時期に、単に、老年病学または老年医学としてのみならず、心理学、社会学、法律学、経済学、人口問題、社会福祉に関する諸社会科学も老年の研究に参加すると共に、old age または senescence の研究から aging の課程についての研究に拡大伸張するに至ったという。

さらに、19世紀には、senectitude (老衰) が注目されるようになった。それ故に、人間を老と死の恐怖から守ることが考察されなければならず、ここに aging (加齢) という言葉が新しい研究上の概念として登場したのではないかと述べている。

加えて、博士は gerontology の包括領域を、N. Shock の概念を用いて

1. 老年人口の増加に伴う社会的ならびに経済的諸問題

2. 個人および集団における aging の心理学的研究
3. aging の生理学的ならびに病理学的側面
4. あらゆる活動における aging の一般生物学的側面

としている。Old age に関する科学的考察は、既述のように、生物学と医学との混淆のちに胚胎したが、その後第1期より第2期を経て第3期の現代に至った。

かくして、geriatrics から gerontology へと発展したのであった。言葉の上から考察すれば、あたかも pediatrics (小児医学) が、paidology (児童学) へ、paidology が再分化して児童心理学や児童社会学、児童医学や児童福祉学が成立したのと同様、gerontology が、現在ようやく発展分化して、老年心理学、老年社会学、老年医学、老年福祉学等の成立をみるようになった。gerontology の近代的提唱は aging の再発見によって老化の本質を究明すると共に、さらに、実践的側面において、老人の遭遇する現実の生活の諸問題や、それらに対する緊急な社会的要望に答えようとしたものとする。

元来、aging ということは、単に人間の問題にとどまらず、生物一般の問題である限り、宗教的感傷は別として、これについての科学的検討は、正に我々に課せられた必須の命題でなければならない。従って、「老年」そして「老人福祉」に関する諸問題は、近年の社会的要求と相俟って切実に実践課題となる。それと共にもう一段掘り下げて、「年をとる」という人生の自然必然的課題に関する理論的考察が、我々の学問的要求として盛り上がってきた。近年における著しい少産少死の傾向から、人口の老化現象と共に高齢人口の絶対的、相対的增加は世界各国共通の現象であるが、とりわけ、わが国においては、平均的寿命の驚異的延長、定年制問題と、高齢者人口の就業困難、都市化・国際化傾向の拡大に伴う地縁的つながりの希薄化、家族制度変革に伴う血縁の人間関係の保持の困難、さらに、社会保障、生活保持の不充足による高年者の生活不安定等々、老化と老人の問題が山積して重要な社会的問題となっている。このような背景を踏まえ

種々の課題を解決するところに老年学の任務があり、また、現実的困難を打開するところに老人福祉の焦点がある。すなわち、近代的老人福祉学は、とりわけわが国において、古来の封建的道德概念に基づく、前近代的敬老の事績、希少価値の老人の権威に対する畏敬尊崇、さらに、貧窮老人の保護救済を主眼とする養老事業から脱却して、老人が老人であるがために経験する社会生活上のあらゆる困難を解決しようとするものである。従って、彼らの段階の如何に拘らずすべての老人の福祉を対象とする社会活動であらねばならなくなった。このような事態こそが、人間の老年期の総合的研究を必要欠くべからざるものにした。生物学、医学、心理学、社会学等々のあらゆる方面を網羅動員して、ある一面は、老人の個人的人生問題、もう一面は高齢化が進んだことによる社会問題として研究する必要がある。このような人間の成熟課程の後半に関する研究が gerontology として、アメリカにおいて大いに提唱されるに至り、わが国においても、重要な学問的関心となった。

博士はそのアメリカから発刊の 'Journal of Gerontology' の表紙にキャッチフレーズ的に書き添えられている "to add life to years, not just years to life" (年齢に生命を加え、生命に年齢を加えるなかれ) をとらえ、生活に新たなる工夫をこらすことにより老人は老人自身の要求や興味や能力に対応するものを見出だすと共に、老人をして、自分の社会的地位や権利義務を自覚せしめ、各々の立場で自分自身の生き甲斐を開拓していくように仕向け、従って、強制的隠退によって生じる生活活動の萎縮早死を防止しようとするところに、老年学の実践的課題がある、と述べている。

老年学の究極目標については、上述の通りであるが、更に具体的に接近するならば、現実の社会生活における老化、および老年期に対する要求に答える為の学問であり、この要求に対して二つの道標を挙げている。その一つは、上記のように各分野からの総合的アプローチによって、人生後半の向老課程および老年期に関する広汎に精密かつ緻密な知見を獲得することにあり、もう一つは現代社会における老人の効用を検討して、いわゆる

“Age is opportunity”（老人なお望みあり）という明澄なる洞察を与えることにある。

とにかく、このような研究調査が礎石となって、高年層の社会的有用性に関して老若各層の蒙をひらき、老人軽視、老人無用の偏見を除去することの肝要さを知らねばならない。要するに、老年学は、老生体ならびに老化現象やその本質に関する学問的要求と社会的責任とに対する省察の所産に間違いなく、オーガニズムことに人間成熟と向老の本質、それに対する社会的環境の設計、向老期の心身の衛生、社会分化生活の変容とその対応の調整に関する諸問題について、総合的に考察しようとするもので、多次元的研究領域を包括するものだと、博士はいう。

そして、1951年アメリカの St. Louis で開かれた第2回老年学会でのパネルディスカッションでの“*What is aging?*”（老化とは何か）ということについては、博士は、以下のように総括している。

aging 現象は極めて複雑多岐にわたり、従ってそれをあらゆる角度、生物学的、生理学的、病理学的、社会学的、心理学的諸領域にわたり、簡単に定義するには余りにも材料が乏しいが、アメリカ式に極めて簡潔に述べると、抽象的だが、結果は次のようである。

1. aging とは、環境の変化に適切に反応しうる組織、機能の欠損である
2. 老年期とは、生活体が自己を統合しようとする機能の減退する時期である
3. 老年というのは、生体の、その器官、組織、機能の衰退をいう
4. aging とは、生活体の適応性の漸進的欠損をいう
5. aging とは、組織および機能の貯蔵の消耗による適応の減退をいう
6. aging とは、年齢の流れと共に起きる変化をいう
7. aging とは、年齢の経過につれて起こる一連の変化、とりわけ身体的ならびに精神的性能の欠損や死亡率の漸増という面に著しく現

われる

以上を統括して、老化とは、組織的にも機能的にも新生と消耗とが unequilibrium あるいは unbalance をきたすことであり、広い意味で homeostasis (生命保持機能) のメカニズムに変化をきたす時期とする。

また、aging という現象、歳をとるということは、誕生の瞬間から始まるが、degeneration と同義ではなく、また、development あるいは maturing といわないで aging という以上は、人生後半の現象を指すという。かくして aging とは、相当年齢を重ねた上の現象と考えるが、「年寄り」または、老化の時期に一線を引くとすれば何歳に引くかを考察する。年令の区分は、生活年齢区分にせよ、生理的区分にせよ、また心理的区分にせよ、次にあげる事象からすこぶる困難である。

1. 全ての組織や機能が一様に減退し始める老化年齢を設定するには、困難である。20歳代で頂点を示し、その後減退する部分もあれば、40歳代になって頂点に達する部分もあり、老化の時期は一定でない。
2. すべての組織、器官、機能は同速で減退するものではなく遅速まちまちである。
3. 一般に高齢期における変化の部分は極めて緩慢である。
4. 同一個人で老化兆候のすべてが、同じ強さで現われるとは限らない。
5. 老化の個人的差異は極めて大きい

以上、身体的方面であるが、まして、精神面においておやである。とにかく、成長発達過程においては、比較的一様性、共通性が認められるのに対して、aging の過程においては、それに乏しい⁹⁾。いずれにしても暦年齢をもって人生を区分することは、まったく人為的でしかない。例えば、乳児期は誕生という状態から、また青年期は春期発動としての初潮、発毛という生理的兆候からというようになんか一様性がある。老化に関しては女性の場合については menopause (月経閉止) をもって、初老という意味を託して老年期の門戸とするという人が多いようだが、しかし、広く見ればこの50歳前後の人はまだあらゆる職業領域、生活分野において人生の

最盛期にあると考えられる。もう少し立ち入るなら更年期変換という事態に初老という概念を託したわけであるが、これは月経閉止という無論女性に限られた問題であり、この時期は一時的にせよ、女性としての身体バランスにある程度の破綻をきたし、適応に若干の異常経験をするとし、人生区分が可能ではないかと考えられる。他方、男性においては、女性よりやや遅れて、精子または精腺に変調をきたすかといわれているが、むしろ、定年による強制退職という社会的危急事態に如何に対処するかという点から一応線を引くことが出来る。正に人生活動の最盛期にある男子が、定年退職を目前に控えて、個人的であれ社会的であれ、その適応に正常を欠くことになるということは、人生の悲劇でなければならないとし、かくして、橘覚勝博士は、女性の生理的更年期に対して、男性の場合は社会的更年期である、と解釈している。

2. 高齢期に関する心理学的考察

(1) 老年期の自我意識

我々が常に問われるところは「一体何歳から老人なのか」「老人とは何なのか」ということである。しかしながら、このような質問に対して明快な回答は、医学的、生理学的についてはともかくとして、心理学的考察に基づいてなされる限りにおいて、多方面からのアプローチの最後に決せられるべきものと思われる。

人間の生涯において、自我意識発頭の顕著な時期として青年期と老年期の二つの時期を見出だすことが出来よう。

E. Spranger¹⁰⁾が青年期の心的特徴として、先ず自我の発見を挙げていることは、今更言うまでもないが、ch. Buhler¹¹⁾の言うところの完成要求が、これを物語る。要するに「我々は青年なり」と意識することは、まったく恣意的に、また、当然の要求として発現する。つまりそれは、心身発達の必然と言えよう。児童が「自分は子供なり」と意識するかぎり、反面、

「自分もやがて大きくなれば」という一種の希望を抱いていることを暗に示す。これは混沌とした状態ではあるが、自己の将来を予想するところにやはり、自我意識の萌芽を認めなければなるまい。しかしながら、これは、青年期や老年期におけるほど透徹味はなく、もちろん一義的なものでもない。これに反して、青年期および老年期は明白な客観的特徴を示し、しかも、これら両時期は、非瞬間的なもので、そこに至るまでの長い生活過程の展開を必要とする。実際、将来に備えるため力強く現在を生きようとする壮年期においては、青年期または老年期におけるような深刻な自我意識は、消失していると考えられる。人生四十にして不惑という考えもあるが、実はこの時期に、人間活動最大の幅を持つのである。しかし、やがて自己の生存の意義や目的に対する追想を呼び起こすようになる。このような過程を経て、老年期に向かうのである。即ち、仕事の将来的可能性を待望する代わりに、過去をかえりみ、現在については嘆息するようになるに至るのだ、と橋博士は推察する。

(2) 老人であるという自我意識の発現とその時期

橋博士は、前節のように老年期を概観して、老年期の特徴を非開発的多様性を持つ自己中心性であるとし、その理由を考察しようとする。

青年期、思春期における自我の発見表現としての自己沈潜は、異性や社会に対する生物学的完成要求としての憧憬を約束するものとして特徴づけられる。他方、老年期における生物学的阻止要求としての異性に対する無関心と社会からの離脱は、寂しい自己反省として第二の自己の発見となる。即ち、前者は、積極的に社会に対する自我の躍動となり、後者は、消極的に社会への無関心による自己退行となり、共に自己中心的となる。

以上の考察に基づいて、橋博士は、高齢者が、一体何歳位で「年寄」になったと自覚したかについて調査をするため、大正天皇銀婚の大典に際し表彰された90歳以上の者、及び昭和天皇即位の盛典に際し表彰された80歳以上の者に、サンプル数350、(有効回答数223のうち80歳以上の者83、90

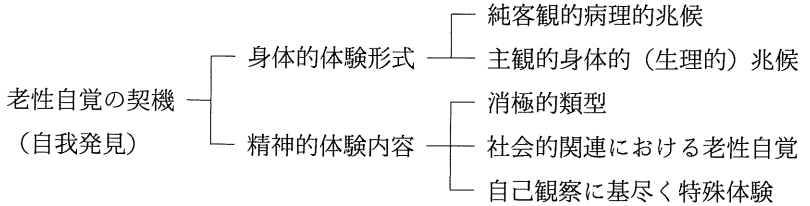
歳以上の者140)、質問表送付の上で回答を求めている。

この調査結果から直ちに眼につく点は、80歳以上の高齢者の自覚年齢(イ)と90歳以上の者のそれ(ロ)との間に格段の差があることである。というのは、前者においては、70歳代が老人であると約半数が示しているのに対し、後者の場合においては、80歳代が老人であるという意見が多い。これが何を物語るかについて、橋博士は、人間の年齢による老若の時期の評価は、加齢するに従い、上昇するものであることを如実に示していると、述べている。こうして、年齢による老若の判定を異にすると、興味深い結論を導いている。

次に、博士は、松本亦太郎博士¹¹⁾が青年男女(年齢13歳より38歳にわたる男女約2,500人)に対して行なった「何歳位から老人と思うか」という調査を用いて、次のような見解を述べている。

年少の女子や精神的教養の乏しい女子は、50歳以上を老人であると答える者もあるが、教養のある女子は、人間の入老期を高齢のところにおかんとする傾向が著しい。また女子美術学校や女子職業学校の如きは外貌観察を主とするものとみえ、極めて容易に人を老人視する。中学校の男生は、高女生に比すれば老人視するその人の年齢が高くない。師範学校の男女生は、中学生よりも老人視する人の年齢がまた高くなり、更に、女子高等師範の女子生徒は老人化年齢を高く見る傾きが多くなり、老人視する対象年齢が脈も高いのは日本女子大生である。要するに、精神的教養の深淺が、老人観に大いなる影響を有し、人生に対して深い興味を持って内面的観察を向ける女子程、人を若く見ようとする傾向がある事実を認めている。つまり、博士によれば、単に外貌的観察に重きをおく者は人を早老視し、精神的活動に注意して、内面的考察を主とする者は老人視傾向が遅いということである。もっとも、この際の評価基準の如何による老人年齢判定の相違と、老人自身の判定の変化とは、おのずから別問題であろうが、大体一致する点、即ち、老人の自覚体験年齢を、70歳頃と断定するのが最も当を得たものであると結論づけている。

その他、F. Giese¹²⁾の同様な研究にふれ、自我発見（老性自覚）の契機の内容を類似的に次のように分類している。



上図を説明すると、即ち「年をとる」ということは、第一に身体的または生体の物的構造と結びつき、従って医学的見地からその組織の病理的損傷をもって、老性変化の特徴を考察し得るのであるから、一応は純客観的と言うことが出来る。第二は、身体的兆候である点からみれば客観的だが、いわゆる身体的状態が「よい」とか「わるい」とかというような気分は、勿論その栄養、代謝、呼吸、血液循環等の生理的機能における兆候と関連する。このような表現それ自身は一種の気持ちという、主観的評価である。

次に、精神的体験内容の第一の消極的類型とは例えば、「年をとった気分はしない」という向老状態を否定するもの、第二は、社会生活の反省に基づいて自己向老の兆しを見出だしたもの、第三は自分自身の特殊体験の反省によって年をとったことを見出だしたものである。

そして、前記、橘博士による調査の223名の内、理由を特記しない者合計65名を除き158名を材料として以下の結論に至っている。

精神的な老性体験の契機は、先ず自我社会との関連において現われる。即ち、社会的関連における老性自覚としては、所謂、社会より離脱し引退するという社会的要求阻止が問題となる。それと共に、その生活は社会より家庭への萎縮過程を辿り、更に、家庭における孤立に極まる。結局のところ、彼らの生活は、家庭本位の自己中心性を発揮することになる。その大体を以下にまとめている。

(イ) 公職より引退すること	4
(ロ) 家庭の主権的地位から隠退すること	6
(ハ) 配偶者または同胞との死別	9
(ニ) 愛児、愛孫との死別	3
(ホ) 友人との死別	2
(ヘ) 子女の成長と孫の出生	12
(ト) 祝典における表彰および賀筵	6
(チ) 一般人からの祖父、祖母という呼称	4

以上について若干の補足をするならば、公職より引退することによって、人間が、自が既に老境に入ったことを自覚するのは、社会生活閉塞の第一歩である。例えば「73歳にして官公職の全部を去り、閉散の身となった、意気体力の喪失薄弱を感じ、としよりになると気付きたり」(81歳、男)の記述があるが、これなど退職的閉散の身となった為、意気消沈し、在職中は、なお、元気であったようにも受けとれ、このような状態は多くの例がある。

配偶者の死は、一方の者に対し精神的衝撃によるかなりの動揺と変化を与える。しかもこれが、生理的的老性転換期の頃に発生すると、直接老性体験となって現われる。なお興味ある点は、配偶者の死をもって老性自覚の兆候としたものすべて女性であったということである。女性にとって夫の存在ということは、自己の社会的生存上の重大なる価値があるに相違なく、婚姻という社会性を既に奪われた者にとっては、配偶者の死は即ち自分自身の社会的存在価値を剥脱するものなのであろう、と当時の博士は述べている。それに対し、男性にとっては、友人の死が、社会的剥脱としての老性自覚を招くことが多いという。「今から10年前85歳の時、一番親しい友人が死亡した。我が村でも年1～2回面会する友があゝ世の人となったとき、ああ自分も余程年をとったと思った。友人が何処にもいなくなった。寂しいわいと思った時、年老いたと気付きました」(95歳、男)の記述から、博士はこう推考する。年1～2回の往来にすぎぬ親友といえども

(それほど彼の社会生活は限定されている) その会合によって往時を物語り得るといふ楽しみと、友人もまだ存命だという力強さを奪われた時、その寂寞は堪え難いに違いあるまい。年をとると共に、交友範囲や機会は次第に減少し、その旧交を温める相手がこのようになるということは、その人にとって社会から幽閉されたことに等しく、社会的寂寥感と不安を経験することとなる。

次に、子女の成長および孫の出生が彼らに自然に与えられる社会的補償であるとみる。「自分の家に孫ができ他からも自然おじいさま扱いされた—72歳頃」(83歳、男)等の事例から博士は、子女の成長とその結婚あるいは孫の出生という代償は、また、老人の社会的決別の最後の喜びとし、喜びの背後には、ただちに社会的、家庭的隠退の寂しさが潜んでいる。加えて、年寿祝賀や高齢表彰を機として、老性自覚を経験したということは、やはり、社会的孤独を約束するしばしの喜びの契機とみている。他人から、お祖父さん、お祖母さん呼ばわりを受け、固有名詞、稀に姓名が記憶から薄らいでいくことも、現在の享樂を失うと共に、過去への追憶によって自己の生活に一抹の潤いを与えようとする彼ら老人にとっては到底堪え難く、苦しい自己反省の契機となるに違いない。

以上、高齢者における自我意識の発現時期及びその内容について詳細に検討してきた。しかも、これらの記述は、高齢者自身の向老体験に基づいたものであるから、彼らが「自分は老人なり」と自覚したことそれ自身については何らの気遣いをも挟む余地はない。ただ、彼らが少なくとも過去に関する回想を手段として口述する限り、そこには、記憶錯誤があり得るかも知れない。

こうして得られた材料によって、まとめられた結果を、博士は更に要約している。

我国では、61歳を本掛還り(還暦)といい、70歳を古来希なりといって古希の祝いが盛んであるが、75歳からようやく老人の呼称を与うべしと主張する結果からみれば、古希とは彼らには何と皮肉に聞こえるであろう。

また、90歳以上の高齢者が自覚年齢を80歳代と主張した者の方が70歳代と主張する者より多いという結果については、90歳以上の寿命を保ち得る者は、一種の寿命的天才であり、従って彼らにとっては老人というような呼称は、侮辱の言辞であり、「自分はまた年寄ではない。若い気持ちでいるぞ」といった気迫を秘めている訳であろう。

老性体験の類型についても、調査に従えば身体的経験によるものが精神的経験によるものに比して約2倍にも達していて、Ciessの結果との偶然の一致がみられる。しかしここに注意すべきは、その自覚の時期については、精神的体験によるものが、身体的体験のそれに比してやや早期に現われることである。これは観察者自身の体験や環境の如何によることはいふ迄もないが、身体的な客観的兆候が明白に発現する以前において、既に精神的兆候が漠然と経験されることを示す。もっとも、観察者の職業や社会的階層の如何により、例えば、知識階層と職人労働者階層とによっても異なる。

最後に精神的体験を統括していえば、老人の自我意識あるいは老性自覚体験は、社会的阻止要求、言い換えれば社会からの離脱による自己中心的生活構造に基づくものであり、更に、自我意識そのものの発現根拠もここにあることになる。

しかも、自我の人格構造、それが最も著しく現われるのは前述のように青年期と向老期である。青年期にあっては、主観の反省が自我の躍動となつて、やがて客観世界との統一をみ、自我が社会を克服するところにその統一相が現われるが、主観の反省が自我の退行となつて社会との決別を余儀なくされる向老期においては、社会が自己を分離することに対する淋しい自覚が現われる。孫の出生に対する家庭的喜びや年寿祝賀の社会的満足は、結局このような生活の代償として、なお、老性自覚の契機となると、橘博士は結んでいる。

以上、昭和4年から44年迄の40余年にわたる橘覚勝博士の研究業績を、

近年に通用すると思われる点を中心に紹介を試みた。この他、博士の研究には高齢者における色彩の好悪、学習、追憶、連想、宗教体験、人生観、老年期の芸術、労働と年齢等々、研究は山積しているが、紙幅の関係から、次稿に譲りたいと思う。

博士は、老人心理の研究から始め一貫して老人問題への関心を持ち続け、老年心理学から老年学という新興科学に挑戦された。戦中戦後の悪い研究条件の下で、ただ一筋に老年問題に取り組み、邁進していかれた博士の先見と業績は、今日振り返って驚くべきことである。現在、老年学や高齢者福祉、老年心理学を研究するものは、博士の開拓的研究——現代においても高水準の——にもっと注目してもよい。

注

- 1) この部分については、橘覚勝著『老年学』のまえがきから引用した。
- 2) この件に関しては、拙著『たのしく学ぶ高齢者福祉』あとがき部分に詳細を述べている。
- 3) M. W. Thewlis, op. cit. chapter Vが Hygiene (Gerocomia) となっている。
- 4) 徒然草における内容については、参考文献第3編第1章中世における老人観を参照されたい。
- 5) S. Hall, op. cit., 72~74
- 6) J. T. Freeman, op. cit., 14~16
- 7) Bacon に関する記述は、J. T. Freeman, op. cit., 16~18による。
- 8) 女性が男性に比して長寿であることに関しては、拙著『たのしく学ぶ高齢者福祉—まり子先生のサクセスフル・エイジング入門』を参照されたい。
- 9) この点については、参考文献第一章老年学の基本課題 Birren の区分36~37を参照されたい。
- 10) E. Spranger, Psychologie des Jugerda Hers. 1925. 38.
- 11) 松本亦太郎 知能心理学 456
- 12) F. Ciese, Erlebnisformen des Alterns. 1928. 5, 72.

老年心理学者・橋覚勝再考

参 考 文 献

- 橋 覚 勝 『老年期』 弘文堂、1941年。
橋 覚 勝 「老年期研究」（大阪大学文学部紀要VI）、1958年。
橋 覚 勝 『老年学』 誠信書房、1971年。
伊東真理子 『たのしく学ぶ高齢者福祉』 ミネルヴァ書房、1995年。